

通言總籙

分六寸三
分二寸五

コ
テ

紙 表

寸
寸

三
四

コ
テ

粹文木

通言總籙叙

彦國佳言を吐こ
と。鋸木屑の如く
罪として絶ず。
粵に京傳青樓
の通言を醜屑に吞
こんで。頼に茶表
紙の一冊を吐。是
鉄拐が仙術にあらず。
放下師の小刀
にあらず。閑之象

通言總籙叙

彦國佳言を吐こ
と。鋸木屑の如く
罪として絶ず。
粵に京傳青樓
の通言を醜屑に吞
こんで。頼に茶表
紙の一冊を吐。是
鉄拐が仙術にあらず。
放下師の小刀
にあらず。閑之象

膝中に顯れ。聽之
言。文面にとど

まる。闇に引出す

牛臺の驛。延

り。中街に驛

る。駒下踏の音耳に

ちかし。實にも難

といへば。朝顔の

泣腫たる清楊に昨

夜の疳積を残し。

二十七明の長を懐

慨ては。花の燕を

清くし。牛臺の驛。中街に驛。延
り。中街に驛。駒下踏の音耳に
ちかし。實にも難。朝顔の
泣腫たる清楊に。昨夜の疳積を
残し。二十七明の長を懐。花の燕を

うれへ。あふよ。みじかき
愁ず。逢夜の短

うらみ。さかり
を恨望ては穢久し

うらやみあさな
き花を羨。且く

わらひがほふなく
の笑顔。晩々

なきがほ。いろむく
泣良も。色無垢の

あり
衣領にさし入たる

すがた。ひるがほ。ほの
容に。鼓子花の閃

めくゆふがほ。いろしろ
屍も壺盧の色。白

まご。さく。そく
なるも緋ひ咲。総

まがき。よく。わけい。つう
離は善。化街に通

しか。くわじつ。あい
じて然も花。實。相

たい。しん。は。た。つ
對し眞に腸を斷。

晩々。泣。白。も。名。母。衣。領。入。る。
客。小。鼓。子。花。乃。以。屍。も。壺。盧。色。白。
あ。る。も。緋。ひ。咲。總。離。ハ。善。を。斷。通。
て。然。も。花。實。相。對。し。腸。を。斷。
我。か。の。離。下。小。店。三。流。花。を。折。て。番。
特。の。事。を。知。る。小。至。も。や。り。も。二。と。

われ ほかきもみせ
我かの籬の下に店

さみせん うつ
三絃の一チを打て。

はんしんはん
番新の萬を知るに

いたら
至ずといへども。

いとち
二と三の緒を

ひらき
肇。猿人卿と共に

あいす ひんし
京傳を愛の一曲

うたつ いごまき
を唱て。糸巻をチト

しかり
ひねること 爾

文きやう自書

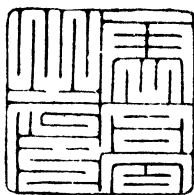


いとち
三絃緒を肇。猿人卿と共に
京傳

うたつ いごまき
を唱て。糸巻をチト

あいす ひんし
京傳を愛の一曲

うたつ いごまき
を唱て。糸巻をチト



自序

我嘗いへること有る。我は我がの隠なりと。夫如
何なれば。持たが病の腹痛
に脚金尿をひらんが爲。尿
をばつ立て。此處に通ふこ
と繁故也。若貧客我
尿を喰ば。葛黄金の蟻銀
とならん。一。日例の長尿
タイラツア。此案作畫を
なしてかた尿の堅をして。

びり尿のするきに和らげ。
世に其尿の撒糞を傳ふ。通
客といふも我尿を覗
ずして。何ぞ尿の穴の廣
ことをしらん。尿が惱
にあらざや。于時天明七年
丁未孟陬

山東屋のひとりむすこ

京はしの傳述

③

自序

我嘗いへる事あり。我は我がの隠なりと。夫如
何なれば。持たが病の腹痛
に脚金尿をひらんが爲。尿
をばつ立て。此處に通ふこ
と繁故也。若貧客我
尿を喰ば。葛黄金の蟻銀
とならん。一。日例の長尿
タイラツア。此案作畫を
なしてかた尿の堅をして。

故也。我嘗いへる事あり。我は我がの隠なりと。夫如
何なれば。持たが病の腹痛
に脚金尿をひらんが爲。尿
をばつ立て。此處に通ふこ
と繁故也。若貧客我
尿を喰ば。葛黄金の蟻銀
とならん。一。日例の長尿
タイラツア。此案作畫を
なしてかた尿の堅をして。

其尿の撒糞を傳ふ。通
客といふも我尿を覗
ずして。何ぞ尿の穴の廣
ことをしらん。尿が惱
にあらざや。于時天明七年
丁未孟陬

山東屋のひとりむすこ
京はしの傳述



通言總離凡例

○此書ハ論語ニ所謂損者三友ヲ以テ大意トス。蓋總離ト題セルハ流行ニ後タル古ノ雜无ヲ以テ也。

○艶治郎ハ青樓ノ通句也。去々春江戸生艶氣桃焼ト云冊子ヲ著シテヨリ。己恍惚ナル客ヲ指テ云爾。因テ以テ此書ニ假テ名トス。氣之介志菴共ニ彼

冊子ニ出ル所ノ名也。

○妹妓及雛妓ト云。其儘ヲ記カ故ニ詔ヲ不改。假名違ヲ正サル。其音ノ訛ヲ知シテカ爲ナリ。

樓上
奇談

吉原楊枝

京傳作

全一冊
東春出版

通言總離凡例

○此書ハ論語ニ所謂損者三友ヲ以テ大意トス。蓋總離ト題セルハ流行ニ後タル古ノ雜无ヲ以テ也。

○艶治郎ハ青樓ノ通句也。去々春江戸生艶氣桃焼ト云。冊子ヲ著シテヨリ。己恍惚ナル客ヲ指テ云爾。因テ以テ此書ニ假テ名トス。氣之介志菴共ニ彼冊子ニ出ル所ノ名也。

○妹妓及雛妓ト云。其儘ヲ記カ故ニ詔ヲ不改。假名違ヲ正サルハ。其音ノ訛ヲ知シメンガ爲ナリ。

樓上
奇談

吉原楊枝

京傳作

全一冊
東春出版

通言總籙

金の魚虎をにらんで。水道の水を。産湯に浴て。御膝元に生れ出ては。拜摺の米を喰て。乳母日傘にて長。金銀の細螺はじきに。陸奥山も卑とし。吉原本田の髮筆の間に。安房上總も近しとす。隅水の鮎も中落を喰す。本町の角屋敷をなげて大門を打は。人の心の花にぞありける。江戸ッ子の根生骨。萬事に渡る日本ばしの真中から。ふりさけみれば神風や。伊勢町の新道に奉公人口入所といふ。簡板のすちむこふ。いつでも黒格子に。らんのはち植の出してあるは。芝蘭の友を旦那と稱す。江戸がみの。北里喜之介が住居。鮑魚のいちぐらに同じ門口。くだすだれの外トに。仇氣屋のひとりむすこ。

黄の無地八丈。三ツついに鳩かんとろの下落。こなんちりめんのらせんしほりのじゅばん。下着はみな黒な。このうらあり。うらは花色ちりめんのすそ廻し。附うらは白羽二重。身はひろき仕立。あせはおりくろの無地八丈。まへ下りながき仕立。五丁ひも。あやまるとかいって。黒のひらうち。のちよんがけ。帯はおなん月茶どんすの小もよたぐろのくつたび。花がいらぎのわきさし。かみはよし原ほんだ。すは町の和やしがぬいたひたい。二日めのさかやき。おしやうさきへはいらつせへ。あん二郎かたへ用い。わろみしあん。くろちりめんの小袖。おなんど茶なきあかく。近眼なり。あさがほの。喜のぼうお宿か。あんさんが来さしたよ。トうはいりみれば。あがりはなに女ばうのきしづをうけながら。あをちやんはけた仙子に。もん所のつ女。しもやけだらけな手て。たいきつちのながしの上で。狗に湯をあびせている。小女。こうしているもんだよ。ちつとしていや。アレごろうじまし。いつそうれしがります。房。おちせつやなしうへだ。あぶらじみた小そで。くるな。このはりのひろいはんあり。こびちやないこの帯。

わきのほうへまわし。まへだれのかわりに。さろわきのふろしきをおびへさき。かみはいなぎむすび。おはぐろをとおとして白胸。これはばんに。おはぐろを。つけやうといふ下地也。まだ左衛門といふ字のつかぬか。あ。此女房もとは松ばやのさるおいらん。せむしんぞうなりしが。ねんあけのう。かねて久しいろきやくにて。喜之介が女ばうになりし也。かみの毛のすい所とみい。わきのまくらだにて。争はず。そのまんま二かいの日あたりへつれていつてはさせや。チャ志庵さん。よくおいでなんしたね。えんさんかへ。此間はお早とでござりやした。うちでござりやすは。ト仕かけた仕事。を。かたよせる。えん。ここのうちのながしは。松ばやの湯どのといふもんだの。しあん。本町の棚したもありやす。喜之助は中じきりのはしらによりか。つていて。さみせんをしのびごまてひいて。なりはつむぎじまのそで口のちときた。うらありの小そで。もへぎさなだの。下。じめを帯にしている。三味せんを下に。喜之介。これはおそろいなすつて。さあこちらへ。えん。でへぶ。ねむそふなかはの。しあん。客をにがした新造。

といふかほだせ。丁子屋だと帳場てうばうでしかられたといふかほだ。喜きのゆふべはつまさんの茶ばんで。升屋へめへりやした。けさ八ッにけへりやして。今をきやした。あんつまさんはやつぱり。深川のせかいかの。しあん おみなもこふてきなやつだよ。このごろも。どこのか番頭ばんとうにかゝへを仕て。もらつたそふだ。深川ふかがわにて。かいへをしてもろふは。吉原よしわらでしんぞうを出すに。ひとしきとなり。喜きの此間も御供で尾多喜やの。およふ。五介。鶴太夫。長二。ちんす。仲吉。なぞといふ。うぞうむぞうを引つれて。むこふじまがござりやした。あんときやうさんや。ぶんきやうさんと。ちがつて青ろあざろうへはとんとござらねへの。はいかいと義太夫はきついもんだ。そうだの。いゝながらこしから。あち川原あちがはらがきさのねづけの。ついたさげのたばこ入からきせるを出して。すい付る。女房はせんとかの火ばちにかゝつて。ひろしまやくわんの茶ちやをついで。兩人へ出す。喜きの介はよりかゝつて。たはちや宗理

が。かいた。きくのはん戸どたなから。豆まめのはいつたこんべいとうをいだし。喜きのこれでもあがりやし。トあん二郎にやうが。しあん。ゑんさんが酒をのまつしやらねへは。玉にきすだよ。喜きのめいよう。今の通は下戸げどさ。とうれしが。しあんさんにやあ。いゝものがある。きのふ長崎屋のこはんが所から。隅田川すみがはをもらつた。おちせかんをさせや。しかしさかなが何も。あんめへす。しあん。かん見まいのこぶ巻まきはなし。あ。の鍋なべのはなんだ。あん。よくげひをいふやつだ。おちせ。おいしいものではなし。けさのおつでござりやすは。しあん。ざつと立て。なべあがれ。とうふ汁じゆがかじけて。いる。きつい松葉屋しょうえつやの晦日みづかひどうふだ。こいつア。冷ひやくちやいかぬや



山まりりやう画

つた。喜の おうたがひは。はれやし
たか。しあん うなぎをとりによりは。

【あん】 どうだらうといふ事か。もふい
ちめるの。ト金座のまへさげから。なん
青か。白か。【しあん】 やつぱり。すち
を。長ガやぎの事さ。あを。白。すじ。み
ちなきくひのつら言也。女ほうは小女にい
うつけて。ほりへうへとりにやる。【おちせ

早くよ。【喜の】 ときに。えんさん。京
町の新造けへの色事も。見だしになつ

たじやあござりやせんか。【えん】 それ
でふさいでいるのさ。二かいのうち

に。このわりひ女郎があるからよ。住
よし屋がはつた新きんとやきがねの。ぬのめぞう
がんの。のべの煙管てむねをたいて見せる。

【しあん】 せんてへ万ぎくにしよきをつ
けて。とつしが相手にするから。はい

らねへわな。うちやかすやうに。【えん】 け
さもおわりやの男がぬを持てきたが。
けいせいも内せうとたて引になつて。
引込でいるそよよ。何かあはれなくさ

ぶえ入のうしろでよまうといふ。ふみ
だつけ。トふたへづるの。兩口の引かけのかみ入

よしへ紅ずりの半切へ着た。ぬをほうり出す。喜
の介はとつてひらき。とてと着た所からさきを
よんでみる。何かいろ／＼なととを著。しよ
せん中の丁でのあい引もきをつけるだらうし。わ
つくもたて引だから。江戸丁のかたをつけて。い
つそはれてきてくれると云ふんてい。末にせひ／＼
といふ事が十斗かいてある。じつは番病とのなれ
合で。えん次郎をいろじかけてよぶ狂言。此ごろ
はやる手也と。さとつていれば。きのす

けは。ふとい女郎とおもひよんでしまひ。【喜の】
出戀のすへせん。何かありがてへ句

ね。あの女郎はたしかに牛殺しに仕て
置なさると。仇をしやすにへ。【えん】 や

りてがいふにやあ。はれてお出なさる
とも。【二かい】を御遠慮なさるともと。【か

わ羽をりのひちをみるよふに。兩方へ
くざらせていふから。どふもならねへ。

こふなつてみれば不便だよ。きついと
をきりかけもしめへから。江戸町のか
たを付て。いつそ表むいていつてやら
うかとも思ふよ。【喜の】 そふなされば。
きついくどくさ。【しあん】 戀つれてむま

い所。ア、いろおとこには何かなる。
トそにある三味せんをとつて。 哥水無月も。
爪のさきでめりやすをひく。

流れはたへぬ浮世のきしに。夜舟こぐ
てふふり袖の。かはにまがきのあとつ
くほどに。はでなうきなの手習も。く
さめ／＼のやるせなく。【おちせ】 モシそ

のめりやすが此ころ弘めのあつたすが
はとやらかへ。そのあとほどふだへ。

【しあん】 泰琳がみやうに節をつけたよ。
夏ぬのさきめの口べにも。ほかへうつ

さぬ心とは。神／＼さんもとこやらも。
とふにせうちであろけれど。合方はれ

た證據をいつみしよと。思やかたきし
わすられぬ。わすられぬ身はおもひい

だしもせぬほどに。思ふてゐるぞへわ
しやはんに。さつしてくだんせわしが
名に。おのじを付ていつかさて。つくろ
ひのなき夏のふじ。【喜の】 京傳がいっ
ぱいに。うがつた文句だ。【えん】 かな
やの白妙が追善のめりやすは何としか

いつたつけの。しあんそれはなつ衣さ。

おちせ 花ぐもりは。四代目の瀬川さんの。追善ついでんだそうだねへ。あん まへの瀬

川はどふしたの。喜の かのんの地内にいやしたが。かこわれたそふでござりやす。おちせ 玉の井さんは。やつ

ぱり仲町にいろかね。あの子もふしやわせたねへ。しあん そふだそうさ。ち

めへだそうだから。相應もふふな所をみたてに出て居るのだろう。このちう。いく

よしのおいさに。言傳ことづけをして。よこしたつけ。おちせ せてへ。うわきか

ら。おこつた事さ。しあん おめへのやうに。喜のさんに情じやうをつくした人も。

あるにノウ。おちせ ヲヤばかりしい。しあん よしはら以來いそばかりしいを。ひ

さしぶりでできたわへ。はごいたの茶はうじで。志庵しあんをしたかた。此うち。あん二郎

は京町のいろ事のうねればなし。喜の介は。ありがてへ。ウ、そうさと。いゝかげんに挨拶あいさつしている所へ。下女はうなぎをかつてくる。女房は

かんを喜の 御心安ひから。そのまんま

だしや。おちせ ヲヤそれでも。あん いゝわなノ。おちせ トラふゆへ。はかまのな

こいつア着ながしのちろりだの。しやれたもんだ。此あいだ。酒になり。うなぎも

喜の ホンニ住よし町の川治から。茶入を持てきておきやした。ごろうじやし。

ト戸開から。茶入を二ッだしてみせる。上いろ。糸きり。くすりのかゝりあんばいを見て。あん

こいつあ。京がまだはへ。新兵衛か。万右衛門だらう。金一枚くらいかの。

こつちらはいつかふなものだ。とんだねき物だ。此ちう。救寄屋川岸の伏甚

から瀬との玉川と。流波りゅうはを見せによこしたが。尤遠州の書付があつたが。四

十兩だいだ目がでるの。袋は白地の小ぼたん。一つは權太夫だつけ。どれもは

くさきはよかつた。しあん 此間橋場で江月のよこ一行をみやした。一片の雲自西自東といふ語さ。ひやうぐもようござりやした。天地はやつぱりふと

じけだが。風帶ふうたい一文字はあんらくあん

さ。あん をれにゆづつてくれめへかの。しあん はなしやすめへよ。喜の 角町の

惣六がかうらいの御所丸きんかいをもつていやしたつけ。品川の万千がもつ

ている松花堂そうくわどうのはていはとんだ出来のいゝものさ。萬千といへば。モシまだ

おめへさんにはなさねへが。柳郊りゅうきやうさんが村田屋で大いのごとき。何とかいふ

女郎でござりやした。此比は村田屋の部屋は扇屋といふもので。萬千もおつ

まもうたをよみやす。あん あそこのその哥といふ女郎をおれがかつたよ。新

宿からこした橋本は。又あつちへかへつたそふだの。おいろといふいふ女郎

があつたつけ。妙國寺めうこくじの仁王にてふんががあがつていたつけ。喜の たゞあ

さのけしきはかりの所だよ。間屋はで馬のいなゝくには。あやまるて。あん 大木戸の石がきに。せきだの金のはさ

んであるのは。なんだの。しあん あれは何のか願をかけるのさ。あん おいは。あの土地におひては不通だよ。ちつと旅たびしてみやうす。とうじにいつた時。賀達かたちが所へ。いつたまうだ。

喜の 御ぞんじなくつてもな所さ。

しあん しかし。夷狄いぢきだもきみありだよ。吉原ならつけとゞけのぬをやらうといふ所へ。墓はかの物をおくうやす。喜の いやもふ墓の物がきちやあおとさわざさ。こわがるものはお應匠おうえいしやうの御留ごりゅう。いやがるものは五ツかばりに正めんをはるの。にぎやかなのは夷講いぎかうさ。みこしをこしらへて。二階中にかいぢゆうをかく内うちもあり。めしたき男おとこをゑびすにこしらへて。はやしたてゝあり内うちもありやす。せんでへ。しろうと芝居しばいのはやる所さ。おちせ モシまへかたは松ばやでも度々たびたび狂言きやうげんがござりやしたねへ。しあん 丸糸まるいとびやなぞにもよくあつたよ。おちせ ば

くがさんが工藤で。玉屋の山三さんが五郎で。大門の四郎兵衛さんがすけ成で。おかしい事がござりやしたつけ。

喜の 狂言といへば。宗十郎松が六けんのおさくをされて。ふる石のとよくらへこつて行くそうさ。おかしいじやあねへかキエ。あん あいつが。中洲ななづでめつかちの地ごくをかつた時ほど。をかしいとはなかつた。おちせ モシ大分おほぶんきなつくさいよ。さんや。そこじやあねへか。あん ほんに芝居のゆきが。らうそくへふつたといふにはいだ。それ和尚わうしやう。ぬしのはをりだそふだ。しあん さあ。こいつア大さはぎだ。かゝあに叱おこられることを仕だした。喜の もちつとの事で。もろせをたのみにいく所だ。しあん しやれ所ではキエはな。あん やけほこりでいふのさ。此間。女房の手りやうりにて。たまごのあつやきにわさびじやうゆ。古なす。もり口のかくや。梅さけのあんばい。あん二

郎しあんへ茶づけをいだす。 あん なるほど和尚わしやうはよくくふぞ。ぬす人には極つた。しあん

もし。松ばやじやあ。小梅の青いのを出すッ。喜の あれはつけめき。扇屋あふでのせんべいの。丁子やのてうあしのせん。

四ツ目屋のかすていら。竹屋たけやの水貝みづがひ。しづか玉屋たまやのゑましむぎ。こいらはつけめさ。しあん 丁子屋ていしやじやあねへが。

はてなといつてへ所だ。喜の はやり言葉もあちなものだ。ちよつといふですと。むしやうにはやるよ。此ごろのはやはり。扇屋あふでのきかふさん。丁子やがはてな。ぶしやれまいぞ。おたのしみさんす。松ばやが。じやあおつせんか。玉やのおにのくび。大文字やのしらアんもよくいふよ。さまといふ事を。せといふやす。ゑちせんやは。しんにといふとを。たんといふね。あん 丁子やの日ひてんさんと。きれいでざんすよと。松ばやの山寺と。さかことば。

いつの間にかすたつたの。善の今でもばう／＼といふものは。しつたかさ。善のおちさん。おめへはよく知つてゐるだらう。大かなやの正月の仕着はなんだつけの。おちせたしか。地が黒で色入の花たてわき。角のつたやが鷹のもやうさ。わかなやが若松にかすみ。中あふみやが花ごうしでござりやす。鶴屋はぼたんの裾模様すももやまの時もあり。ひぢりめんの無地の事もござりやす。角の玉屋はぼたんさ。松がねやがさくら川さ。おちせ松ばやのくじやくしぼりと。大ゑびやの鳳凰ほうおうがよくまちがひやしたつけ。おんあふぎやの十二ひとへ。丁子屋の若松に額はよく人がしつてゐる。おちせ瀬川さんのつき出しの時はいつでもかれいで。ハッはしにかきつばたのもやうでござりやす。大文字屋のつき出しはいつでも。とかくさかなのもやうさ。おん正月元日に礼にでる

のは。大びしやばかりだの。おちせさやうさ。善のつき出しの時へ屋もちばかり。うちへのころはどふしたわけだしらん。おちせあれはさ。わかりやせんよ。松ばやはせんてへかてへ内でござりやす。女郎衆やうぢゆうに上草履うはぢりをはかせやせん。今でもはくものは瀬川さん。松人さん。へ屋もちで二人ふたりばかりござりやしやう。そして。れい日にはみんなぞうりさ。くしかふがいの。中座なぐわぞうげまきゑでござりやす。さんや。でへふいぶるによ。ちつとさしくべればいゝ。おん丁子屋もかてへ内だよ。客きやくのまへはうはぞうりを手にもつてとふるの。客きやくのこねへ女郎はつるしがとぼると。中の町へださねへね。二かいに小便所の二ところ有と。はしごを庭からあがるやうに付てあるは。丁子やばかりだ。善のまるゑびやにははしごが二所あるによ。扇屋の小便所はど遠

ひのはあるめへ。きむい時分じぶんなぞはてへぎだよ。半七がかつばを着て。とこをまはすも久しいだらけだ。玉屋もかてへうちさ。そしてはやく見せをひかせる内だよ。松ばやじやあ。あね女郎の事をわつちらんといふね。扇屋じやあざしきでといふやす。丁子やじやあ。あね女郎のそのあね女郎の事を。おほきいおいらんといふやす。おん玉屋といへば。紫夕むらさきがことなり。將葉しょうははあがつたかの。善のこんちう。我物がぶつが香角かうかくのませで。二ばんまけたそうさ。おん琴葉書画きんはしやうがをやるきだの。傾城けいじやうにもいろ／＼なくせがあるものだ。きさかたが。水かゞみのめりやすがすき。瀬川が茶のゆ。哥かぎくが地ぐちのてんとり。すがはらが梅をたち。わかづるが俳諧はいかい。ひなづるが團十郎だんじやうびいき。松人がどふしたのだへ。丁山がちよつとみな。たき川が三ツ七寶さんしちほうの紋所もんじよをかへす。九重

がかるの外に男の子をかくへておくことなどは。今でのがちだ。しんこんちう。今戸の墨賀がりやうへめへりやしたら。いづ屋のせつべい。くれき松屋のぎよみん。いづみやのこゑん。いの字いせ屋のせいら。長崎屋のこはん。おはりやせつ久。かんばくといふいしや。宗匠のとりう。なぞがきていて。梅枝点のばひしとはすがはいかをしていやした。いなぎも源氏の書入にこつていやすよ。地内のおたみがしんで。ちからおとしさ。ほかがつりに斗かゝつていやす。しんけふは廿六日だの。あさつては三河じまの不動へいこうせへ。喜のぼう。喜めへりやしやう。しんあと月の不動ほど。けいせいのでた事はおほへねへ。ノッ喜のぼう。まづきさかたか。たはらやのよしの。にしき戸の若づるがでるし。七こしがでるし。七里がでるし。扇屋

のうたかたがでる。喜岩越もでやした。からこともたしか見かけやした。げいしやも大分見かけやした。あさをに。駒次。おりせ。しんひやうごやのおくにもきたつけ。なるほどげいしやは繁昌だ。けんばんにそばがたへぬはづだ。さしきへうでると。けんばんと一分がそばをかふなり。しんも羅月がいもうとはいいつ梅と。やうじやのおいくを。そうじめへにしたといふかはだねへ。あれで。うすいもがねへといふ娘さ。しん何。いゝものか。うすいも所か。ひめじかわの紋からといふつらだ。時にちよつとよつて。太ばなしになつた。ちよふどいゝ時分だの。もふ昼みせのおみきどつくりもひけたらう。喜のぼう。あいばつせへ。こんやは一明目のつもりだノッおしやう。しんおちさん。喜のさんをあづかるに。おれといつちやあ振新のいちやつきでもさせるこつちやあねへ。いろ

男のていしを持と心づかいだよ。おちさだいじのものだが。おかし申やしやふ。喜とはいへども。此ごろよしはらからきた奴を。ちらとみたゆへ。喜の介がいる事のできた事をしよ。喜のお供をいたしやしやう。おちせ。着物をだしてくりや。喜の喜の一日ときいてあいた口へもちなり。女ぼうはつうめいゝるめにもたえず。立て戸たなかくさねだんすのひき出しから。ゆうきじまの上着。くじやくしぼりに。せきちくあられのへりをとつた下着。ひちりめんのじゆばん。くる上田のはおりに。これはあん二郎にもらつたのゆへ。女ぼうのつうにて。おはむきにきせてやる。喜の介は着てしまひ。かみ入をふところへ入し。喜のちよつと髪をなでつけてくりや。女ぼうはる。二分ほどするつげのくしてなでつけ。松ばかんさして。びんの所をまきこむ。しんおへむすばれし。千すぢをわけてみだれがみ。手にとりぐゝのもの思ひ。喜のおきやあがれ。おちせサアよふござりやす。あれせわしない。しんこゝのうちの戸だな。丁山がつきの間といふもんだの。喜の介はゆかうびやうぶにかゝつてゐる。若松屋のわかづるが出した。もちつきのてぬぐひを。喜のサアお出なさり

やしえん二部。立おちせ ヲヤし
あんさん。やけあなが目にたちやせん
は。モシづきんはよししかへ。喜のこふ

たつの口へでもいつたといつておき
や。それもよし。これもよし。トそこらを見廻しながら
ら。かつて何かわすれたやうだはへ。ト少
へて。ヲ、それ／＼ふくい町の豊國が所
から人がきたら。わすれずに此ちうの
やしきのを二分やるのだよ。トだんばし
しから。うら こいつもはなくなつた
す。トはいて出る。狐が跡について出そうにする。小女はだきながら。えん二部としあんがぞう
をす。しあん これゆびぬきがをちて
るよ。えん ちかめがとんだ物をみつ
け出した。おちさん。いつてきやす。
おちせ さやうなら。ごきげんよふ。ヲ
ツト おつむりがあぶねへ。喜のサアお
さきへ

此間柳ばしより大さんばし迄。船中の

しやれ。よしはらやうじのふさならで。
あまり長／＼しければこゝにもらす。

○ 其二

けふ此比は。いたこやかるい沢さはではや
る時分じぶん。さうへ田ぞろいにゆかたを下
着。こひ茶ざやの袖うち。もへぎさな
だのうら付で。とんだあやまるなり西
のくぼのがせんほう谷や。本所のわり
げすいあたりで見かけるてあい。くら
宿でいやがられるなま通ども二三人。
兩方へわかれて土手のはしを通りな
ら。ひとりのにほんざし。くわへ煙管
をはたいて。田風アレ／＼みさつせへ。田
中の方から。三まいの早かごがくるが。
いまじぶんなせあねへに。いそがせる
だらうの。田ほんに何者だらうの。こ
いつはげせねへはへ。トいふうち。早かご
へ。かづきもどす。夜次郎 あれみさつせ
へ。かつぎもどすせ。へ、きこへた。
あれはたしか。かごをかき習ふのだ。

里なるほどそういへば。中にへんなや
つがのつて居る。相なんになつても。
ならひのいることだの。これ公こうが所に。
孔方は少／＼なししか。小ぎくを一帖か
いてへ。をれば。すこぶる秋風だて。
函青樓せうろうのきやくが。そんなげびなもの
を持ものか。さんならいつくらもある。
傾城けいせいのわるがみを。かすりごうしとさ
つせへな。田それでもかみがねへと。
何かふところがいねへやうだ。田コレ
かみをゆふなら。この髪結床がい
せ。こつちらのかみいどこは。へただ
せ。函此高札場はよくできた。八十
兩かゝつたといふことだ。どふいふも
んだらうの。花こうとくじの門じやあ
ねへか。トしやれながら来る。跡よりなはいしあ
てえん次郎。きたりうのでんがく扇にて夕日をよ
けながら。きれいごとにてゆう／＼と来る。なま
つうどもは。跡をふりかへり／＼見て。あもん坂
をうりく。中ゆびとくすりゆびでひたいをくると
なでゝみて。はなをちんとかみ。うはま
へのそり先を一ツつばり行する。 ○川竹

の流れはたへずして。しかも元のきやくにあらず。さとうかるゝむだ人は。かつきれかつなじみて。久しく來る事なしといへども。つき出しからなじみて。年のあくる迄くるきやくも。またすくなくらず。何がどふだかわからねど。たゞ人のきをつりあぐる大よせ小よせのくるはの名とりが。すらりとおならびなされて。よい中の町の夕景色。左りの竹村に比して。右側の七けん軒をならぶ。はでな遊びを駿河屋がまへ。此時まじめなるらんとしやれながら。門口より。〔しあん〕此間はおせはでござへした。〔あん二郎〕おしやう。むかふの兵庫やに居るのが。丁子屋のつき出しだ。よつぽど瀬川といふばがあるによ。〔喜の〕かはるとは先名がうつくしい。トいながら。三人あがる。〔下女〕これはおそろいなすつて。よふ御出なさりました。モシゑんさんがお出なさりま

したよ。女房おふじかつてより出る。おゑんと茶つむきのふとて。黒七子の帯。かみは京。〔女房〕よふお出なされました。〔ゑん〕主人はどこだ。〔女房〕たゞいまお座敷へ。まいりました。ホニ江戸でうから度々お人でござりました。よほどお久しぶりでござりますね。〔ゑん〕久しぶりもてへそふだ。〔しあん〕吉原じゃあ。四五日こねへと。久しぶりのよふだそふさ。〔女房〕モシゑんさん。京町に何かおせかいが。おできなすつたそふでござりますね。あんまりお浮氣をなされますな。それでお久しぶりだと申ますのさ。ト三人がこし物をとつ。ねへ。きのさん。〔ゑん〕いんにやよ。それにもわけのある事。どふでしまいはろくな事には。なるめへと思つて。こつちへは沙汰なしにした。〔女房〕それはよふござりますが。もし江戸丁でもしれましては。めつ少しまじ。〔喜の〕そのおせけへもすんだ事だそうだ。もふこゝ切りの事

さ。〔女房〕さやうなら。よふござりますけども。ト立て神だなのよこ手。かたなけへわきざしをかけ。しよくたいをともし。手あたいをまん中へ出ス。〔ゑん〕いのじいせやの二かいに。うしろを向いてゐるのは誰だ。〔女房〕扇屋の扇のさんで御ざります。〔喜の〕ふたいはなれたものさ。〔しあん〕つたやのさんしう。鶴屋の在原。此春のつき出しはどれもあたりだ。丁子屋の名山を此中向嶋で見かけやした。七越といふきみがござります。〔ゑん〕丁子やといへば。みき山もんだうつくしくなつた。〔女房〕松ばやのをはやく見たうござります。此内吸物すどんぶり。ちつとおすいなされまし。〔しあん〕サアはじめなさへ。女房さやう。ト酒になる。とゑん二郎へ文衾まはる。女房へさし祝義をする。ぬな一通り盃すみ。此間。松田や。〔ゑん〕むかふ通るは藤兵衛じやねへか。〔しあん〕藤兵衛ノゝが三人通る。〔喜の〕おきやあがれ。〔ゑん〕コレ

「藤兵衛」。『あん』でたがねへ藤兵衛。『喜』藤兵衛ます藤兵衛はまゝの紅葉哉。『あん』これちつとだまらねへか。藤兵衛はいのじいせやの前あ。藤兵衛これとはどなたかと存じました。ごきげんよふござりますか。『あん』どこぞへ行のか。『藤』ひなづるさんのおざしきへ参ります。『あん』ざしきでなくば言そうと思つてさ。『藤』それは残念でござります。松藏。藤二。三味子や。我物がまいつてをりますから。ぬけ憎うござります。今晚はやはり一町目でござりますか。モシきのさま。とらけんはどふでござります。『喜』又まかさうと思つて。いそぐならいつて來ねへ。『藤』さやうなら御めんなされまし。かせわしく。又かけて二丁目へはいる。二丁目より竹屋の哥きぬ出て。跡より哥菊出てくる。『あん』和尙。むかふから來るのはだれだと思ふ。『あん』竹屋の哥衣さ。『喜』こいつはきつゝい。それでは近眼とは思

れねへわへ。『あん』顔も提燈の紋所もわからねへが。禿がみのわきへ黒い糸をさげているのは哥衣と。大文字やのはた巻斗さ。『あん』あじな所にめきゝがあるの。『安房』お二人ながら竹屋の千兩箱で。ござります。『あん』哥菊が地口はどふだの。『安房』もふ一ツあがりません。か。ゑんさん。お茶漬わへ。『あん』腹中まん／＼さ。しあん餅子をいぢつて見て。『あん』もちつと熱くしてくんなさへ。物出るふたをとつてみて。『喜』イヤアかもせんば。葉付大根。ありがてへわへ。『あん』料るもんだよ。ト云所へ淵川。めなま若へ。お藤さんに。おいらんでおつせへす。あのけさのふみをとけておくんなしたかと。のれんをひつば。『安房』そふ申てくりや。けさ程三保藏にもたせて遣しましたが。おるすだと申て御返事は参りませんと。申てくりや。つて

う。勝手より。三保藏。まいりません。『めなま』そんならあの。そふ申ししいしやう。『安房』ちつと遊んでいかねへか。『めなま』しかられんすよ。『あん』コレあの子や。『安房』めなま。あなたがなんとかおつしやるよ。『めなま』なんでおざりいすへ。『あん』おいらんと。とふちさんによくいつてくりや。『めなま』アイそふ申ししいやう。ト出て。『安房』とんだ利口な子でござります。三保藏や。其送り物は。玉やのたが袖さんのおざしきへ行のだよ。そしてみつさんは七ツにかへらつしやるそうだから。かこやがきたら三てふだよ。ち。ゑん二郎があいかた松田屋のおいらんおす川。わかに來る。眉如三翠羽。肌如三白等。腰如三練素。齒如三含貝。嬌然一笑。悉陽城。迷三下蔡。其ふせい。田丁のかたばみや久兵衛がぬつた。からいの態ぬひにだてもんやうちかけ。白にゆすのへりとむく。かみは手がらわけ。かみのうへは小間物屋の見せの如く。禿のかみ一人は。はりうち。一人はやつこしまだ。うつくしくかみゆひの長二手際をみ

せ。ふり袖しんぞう。川波。せわしんぞう玉夕。つきそひきたるばんしん玉夕。おいらんのもんをなをし。打かけの下りたるをなをし。えんきへこしをかける。おす川につこりとわらひ。
[おす川] おふじさん。どふなんししたへ。トいつた。
[女房] さあおいらん。お上りなされまし。
[おす川] こつがよふすよ。
[玉夕] えんさん。よくお出なんしたね。
[喜の] いつもうるはしいおかはつきね。
[しあん] 何かむしやうにきれへでござりやす。
[玉夕] なぶつておくんなんすな。おがみんすにへ引。
[しあん] 松田屋わかい者清二。てうちんをけし。おたのみ申ますと出て行。玉夕は茶地のろきんの長づゝから。又つけてえん二郎みなくへやる。おす川。えん。かい。口をつけてやる。何。
[おす川] いの字いせ屋に。ときやうさんがいさつしやるから。おれが言ふとつて。よくお出なんししたといつてきや。下から犬がのびをして出る。
[川波] ヤアわつちといへば。びつくりしいしたよ。
[女房] 此お盃はわたくしがおあづかり申ましやう。お雪や。すぐ

につれ申しや。えん。五町の万里と。おしづ。八百吉をよびにやつてくだせへ。
[女房] かしこまりました。下女でち先へ出る。けいせいも。
[女房] さやうなら。立。みなく。いづる。
[おす川] おやかましうござりいした。
[女房] どなたも御きげんよう。みなく。一町へまがりさきへ行。喜の。のちよつと松田屋のみせ先へより。
[井川] 井川さん。夏里さん。どふなすつた。何かしんに成つてかきなさるね。
[なつ里] 道がちかふおすね。
[喜の] こんやはえんさんの附合さ。
[地廻り] ナンだ。あかいべゝに。青いべゝに。白ひべゝをきこ。こゝの見せはなんの事はねへ。げくわの薬箱といふもんだ。
[夏里] エ、すかねへぞよウ引。
[喜の] 後程お目に懸りやせう。そばを行。うちはどくゝにぎやかにて。ともべやのまへにおいらんたちの提燈ならべてあり。長柄はかへにおいをかけてならべ。廻し

かたはたき火にあたり。大がまのうへへの十二のとうみやうはけんびし。山十五とびやうの山をてらす。
[源兵衛] 源兵衛どん。ト。い。な。が。ら。み。な。く。の。は。き。ものをそのへ上。そう。花。れ。は。つ。伊。平。進。源兵衛。お客人だぞよ。みなく。は。し。跡。兵衛。に。女。郎。四。五。人。の。こ。へ。て。え。ん。さん。よ。源。兵。衛。く。お。い。で。な。ん。し。た。と。く。ち。ん。に。い。ふ。源。兵。衛。すぐ。に。座。敷。へ。い。れ。申。せ。う。ト。先。へ。立。て。ゆ。大。ふ。う。じ。の。奴。を。ひ。や。た。の。も。ど。ウ。引。そ。う。し。木。に。う。ち。な。が。ら。え。ん。た。の。も。ど。ウ。引。そ。う。ち。で。さ。き。つ。か。ら。呼。ば。つ。し。や。る。ぞ。よ。ひ。と。差。こ。ん。た。め。ど。け。へ。行。長。崎。屋。へ。行。は。さ。が。り。い。す。お。す。川。は。い。つ。こ。へ。か。な。く。な。り。え。ん。さん。玉。夕。ふ。り。し。ん。川。波。つ。き。そ。ひ。さ。し。き。へ。は。い。る。い。か。ふ。る。は。お。い。ら。ん。と。し。ん。ば。ち。を。書。た。天。水。を。け。の。う。へ。を。く。梅。
○そもおす川が坐敷のこのみ。中の間の飾夜具は錦の山の如く。一面の琴は遙に見る瀧に似たり。圍の常盤は松風の音かと驚き。ゆこうの小袖は楓の紅葉したるが如し。本間の天井には四季の唄いろ。をの。

花の手柄をみせ。はりつけには朱簾を画て雲上にちかし。ちん金彫の机に義之の墨帖をちらし。湖月萬葉のそうしを並。異香四方にくんじて。大盡の紙花こゝにつき。龍のくびなる玉。つばくらめの子やす貝も。こゝに持来るべしと思ふばかり。座敷の真中に銀しよくをてらし。朱時繪のたばこぼん。さんぼうの盃臺。かけばんなをしてある。

〔あん〕 家名は松をもつてし。紋所は柏をもつてし。床柱は栗をもつてす。

〔喜の〕 サアむづかしい事をいふだした。此からかみはだが書た。〔玉夕〕 弁州さんがおかきなんしたよ。〔あん〕 もふとま

りは知れたから。大のみにするがいう。此うち廻し方盃でうし持来り。ちうそくのしんを切て行所。お定りの通。なかい吸物持来る。茶やのうてうちをけし。はきものと一緒にちうかへをく。喜の介にあがるふりそで。〔夏瀬〕 政さんよしなんし。いつつつて階子へ札

をはらせんすにへ引。てかけ来る。〔あん〕 休日湯屋を見るやうに。でへぶしやぐの。〔喜の〕 そんなにさわいだら又。やりてがみせ三味線の一といふ聲で。りくつをいをふが。〔夏瀬〕 それでもからかいんさアナ。えんさんよくお出なんしたね。お雪どん。どふした。〔ト茶〕 女のかたへとりつく跡より。しあ。〔あん〕 此子達二人りはむしやうに美しくなつたよ。

〔玉夕〕 あいさ。いつそ色氣づきんしたよ。礼日もふり袖の跡おさへは。ぬしたちふたりさ。〔あん〕 早くつき出しになつた所をみたい。其時はしらぬかはだらうの。夏いろさんの初日は。大方和尚がするだろう。〔あん〕 アイサその時になると。着物の樂しがござりやす。上衣はまぐろの流のぼり。むくはぼたもちのちらしき。〔夏瀬〕 よしておくんなんし。ばかししい。〔玉夕〕 お雪どん。一ツのまつせへナ。〔夏瀬〕 どれ。おれがつ

いでやらうよ。〔茶女〕 イ、エこゝへおくんなさりまし。〔夏瀬〕 一ツのまつせへ。

〔喜の〕 おいらんはどけへ行しつた。今迄いさしつたやうだが。もふどけへかみえなくなつた。はとゞきすのようだ。

〔あん〕 松田屋のけいせいも。駄蠟燭を見るやうに。折ふしたちぎへがするて。あやまるよ。〔玉夕〕 わつちらんは。

今一生のきやく人の所へ。あいさつに。下ざしきへお出なんしたよ。琴のやよび申てきや。川波さんたばこを。出しておくんなんし。〔川波〕 此引だし

かへ。おつせんよ。〔玉夕〕 エ、じれつてへ。そこにあるからお見なんし。〔あん〕 きようかるかやをみなへしと聞へるはへ。でへぶ地口が御上達だ。

〔玉夕〕 それでもじれつたふおすアナ。〔ト云所〕 するがやの男。おくり物もち来る。朱のちんきんの九ぼん。あらう朱のかくひらはまどほり。きてのどんぶりに。はづけに生煎油をかけたやつ。これでちやづれといはねばかり。傾城へので

んとり。ちや屋（茶や房） ゑんさんに七右衛門申ます。こんばんはよふお出なされしました。只今玉やのお客人を納ましてそれへ参ります。まつびら御めんなすつてくださりましと。申付ました。そして玉やで小紫さんがあなたへよろしくと。をつしやりました。てかへる所へ表（おもて）ざしきのをいらん。かみはしのぶわげ。さゝりんどうのへりとむく斗（うちかけ）にして来る。
 〔とめ山〕 ゑんさん。よくお出なんしたね。
 〔ゑん〕 イヤアとめ山さん。どふなさりやした。話があるからちよつとこへお出なせへ。
 〔とめ山〕 マアちよつといつて。後に参りいしやう。
 〔とめ山〕 ト肝（かた）のあたりでちみすのはなかみで。むねをあふきながらきたる。
 〔おす川〕 も何だかわからぬ事のきつてになつて参りました。
 〔おす川〕 おいらん。これはどふでござりやす。
 〔玉夕〕 くれ／＼は。まいりましたかへ。
 〔おす川〕 さいした／＼。
 〔玉夕〕 じやあおつせ

んかへ。
 〔おす川〕 あいさ。
 〔しあん〕 おめへ方は。しやあねへかの。蚊（か）はねへかの。大音（おおおん）寺めへのとふじやあ。あるめへし。
 〔おす川〕 もしへ。下でめりやすの本をもらつて参りました。長崎屋でぶんきようさんが。おひろめなんしたのでおす。いつそあだでようすよ。
 〔玉夕〕 ヲアおみせんし。すがはとやらいふめりやすかへ。早く覺（おぼ）へとふすねへ。
 〔おす川〕 まあおのちにおみなし。此うちぜん出る。きうるしのわん。せいひつむし。くいのくわいせきぜんにて。二つき松田屋へしよ。かりは松田屋のつけ目にて。れんこんのらん切也。はしは箱根（はこね）からとりよせる。萩の先をけずつたの也。これも今のりうぎ也。みな／＼はらばよしゆへ。茶びんとものにならば。たばかり。ぜんはざしきの掬小舟となる。こへ女（おんな）けいしや。八百吉おしづ。たいこち五町万里。するがやてしゆ。七右衛門来り。大さはきになる。此所のしやれ。あまりそうくしくて。きとれぬゆへ。こゝにりやくす。そふこふするうちひけをうつゆへ。ゑん二郎がここをおさめ。喜之介。しあんも。それ／＼のざしきへ行。けいしやたいこち持みな／＼かへる。おす川が次の間をたきて。てうあいのぜんをとりまき。しんぞうとも。けびぞうをはじめんす

りぶたの上に。くわへの丸には。こほうかのふしやのあたまたる如く。しゝたけのうまには。手習（てなび）双紙（ふたじ）を引きさいたるに似たり。ようらうてのまた茶碗（ちawan）のなかは。ふるなすのつけたのに。ききやうゆをかけたや。
 〔川渡〕 志庵（しあん）さんはどふなんした。
 〔夏いろ〕 いつそふ酔（よ）いきつてねてしまいいした。いつそ。すかねへ近眼坊主（ちんがんぼうず）で。おすよ。すかねへぞよ。
 〔川渡〕 おやばからしい。何もたべる物が。おつせんよ。
 〔夏いろ〕 となりへ梅づけをとりによればようしたねへ。これ／＼。その子はだれた。此土びんへ茶を一つもつてきてくりや。いゝ子だぞ。
 〔おす川〕 はしのかわりにした。松ばのかんざしを。行燈（あんどん）へつゝきて。ふいてす。おす川がかぶるは前（まへ）ざしきをぬいて。りやうしのふたへ入。ちがいたなへをき。ねまきを帯へはきま。おいでんの節（ふし）をしまひ。火を入れて。それ／＼そこをかたづけ。〔玉夕〕 もふいつてねや。また長火鉢へあたつてべん／＼と起て居（ゐ）めの。惣（そう）免（めん）のあたるひばち。もつとも下。
 〔おす川〕 さやうならお休なんし。〔おす川〕 玉夕さん／＼。
 〔玉夕〕 何ん

でおすへ。鶴うら あのね／＼。これ／＼がさつき見せへ参りしてね。あさつて来やうと申ししいしたよ。ぬしにもよく言てくれと申て。おしやべりをだしきつて参りした。ぬしにもとんだうらみがある言のはのと言て参りした。よろこんでोकくんなんし。玉夕 わつちといへば。かたつきし主のきなんすのを待切てをりいさアなア。此中のぬを屈てくんなんしたと。おつせへしだかへ。文さんもあんまりすかねへ不人情だよ。鶴誦 はらをおたちなんすな。ぬしがつれ申てきいすとき。あさつてはしまつていろとつて。参りした。玉夕 ぬしといへば。うれしがりきつているの。鶴誦 それでもうれしうおさなの。玉夕 それはそふと川波さん。さつき山崎の人に。ひな形をやつてोकくんなんしたか。川波 もつてまいりしたよ。玉夕 けふは廿六日だね。うれしうお

〔女郎〕男心のにくいのも嬉^{うれ}ほどのやばとなりいしたのさ。サア 誤^{あやまり}すから。お向^{むか}なんし。さみしうおきアア。ぬしにき、申しいす事がおすにへ。ゆふべ。どけへお出なんした。京町かへ。〔客〕ッおつな事をいふの。京町のねこがあげや町へ通^とつたうわさは聞^きたが。おれが京町へいつた沙汰^{さた}はまだ聞^きかなんだ。〔女郎〕よしとおくんなんし。とめ川さんが中の町で見^みかけたと。おつせへした。サア本とうにおつせへし。／＼。おい、なんせんと。くすぐりいすにへ。〔客〕これさ。よさねへか。ぶちのめすぞよ。〔女郎〕そりやあ。うそでおすが。ほんに主^まア。わつちを呼^よんでおくんなんす氣かへ。〔客〕此比はでへぶ。ぐちになつたせ。〔女郎〕それでも若^{わか}ぬしのとつさんやかゝさんが。不承^{ふしょう}知な時は。どふしんしやうねへ。それを思ふと。死たふおすよ。〔客〕それよりまた。先が

丸二年三月といふ物だから。其中^{そのうち}にはそつちに。とんだ事ができるだらう。〔女郎〕よくつもおみなんし。五年このかた。わつちが身^みのためにもわるし。ぬしのためにもわるいと。たび／＼あきらめて見ても。思ひ切^きれんせんもの。を。ほんにあく縁^{えん}でおつしやうよ。ぬしもそふ思つておくんなんし。あれさ。また寐^ねなんす。鼻^{はな}へ小よりを入^いれんすにへ。〔客〕これさ。あやまつたよ。こんやは無^む性にねむい。たばこを吸^{すい}付てくりや。てめへおれが事ばかり。そんなにいふが。をれが顔^{かほ}のたゝねへやうな事をするなよ。こんなのい句を出^ですやうになつちやあ。たまらねへ。〔女郎〕まだ其やうにお疑^{うたが}ひなんすなら。此うへゝゆびの二本や三本は。いといへせん。〔客〕てめへに指^{ゆび}を切^きてもらつたとて黒^{くろ}焼^{やき}にして。むしぐすりにはなるめへし。塩^{しほ}をつけて焼^やてもくはれね

へ。〔女郎〕そんなら。どふすればよふす。じれつたふすにへ。〔客〕何かあじにゑきもねへ事をいゝ出した。少し腹^{はら}がきたはへ。さつきそこにあつたのは何^{なに}だ。〔女郎〕仕切^{しき}場^ばておすよ。〔客〕ッそいつはあやまる。れいの事^{こと}也^{なり}。〔客〕小梅^{こばな}のかり／＼するので。茶^{ちや}づりにしやう。〔女郎〕これ／＼。太兵衛^{たへいゑ}どん／＼。これさ。ごしやうになるからの。茶^{ちや}づけせんを一せんこさへてきて。くだせへし。〔客〕この世界^{せかい}に引^ひかへて。とな。〔女郎〕あれりざしきは太^おかんしやく。さわつてもおくんなんすな。けがれんす。ぬしやあ。わりいしやれだよ。〔客〕そんならどふしても。あの客^{きやく}をきれる事は。ならねへな。〔女郎〕それが氣^きにいらねへで。主^まがお出^でなんせんでも。きれる事はなりいせん。わつちや。正^{ただ}直^{ただ}ぬしの推^{おし}量^{りょう}のとふり。あの客人^{きやくじん}にはれていんすはな。〔客〕でへぶ。てめへ

は白うばけに。ごふてきをいふな。それじやあもふ。料簡がならねへはへ。女郎。りやうけんとは。兩方の手に劍をもたせる事かへ。あぶなふおす。およしなんし。客何だこいつ。いかと思やあがつて。おれがこふいふ句を出さ日になつちやあ。覺ごうしろ。まづ。でへ。この枕の紋所も氣にくわねへ。此きものゝ裾もようのあたりもはくじよう仕てしまへ。女郎。これさ。そねへに足げにしなんすな。大事の色男の紋でおさアナ。密こふすりやア。どふする。これへ。しやうぶ刀の身をみるよふに。白イ粉ばかりぬつて。つら斗うつくしくつても。いきしにのねへ女郎はきれへだ。此女郎は此くらいなやつ。こいつは此位なやつと。てへげへ女郎のねうちをして。つきやつてやれば。いゝかと思つて。陸あがつた河童をみるよふに。ぐにや

／＼する女郎はこつちから。おさらばだはへ。女郎。サア。それを聞こふばかりでおす。そんな氣に入らぬ女郎なら。はやくおさらばをして。お歸なんし。客。歸らうが歸るめへが。うつちやつておきやあがれ。おれが。ちやあ。そねへにこはいか。道理でぶる／＼ふるへるな。この中の町の何屋のうちにやあ。せつちんが何軒あつて。何やの裏にやあはきだめがいくつあると。四ッ手にわかざりのかゝつている時分から。きつねのまいこむ時分まで。三ッぶとんの上におしづまつていりやあ。どけへいつても色男一丁の役はしてくる男だ。手めへの顔をふむには手間障は入らねへ。跡でかまるめへぞよ。女郎。ぬしやあ紙屑拾かへ。よく閑所やはきだめを知てお出なんす。男一疋といふなんすからは。たゞし犬の生がはりかへ。ヲきみの悪い。じゆす

かけとやら。なべかぶりとやらじやおつせんかへ。もふいゝなんす事かなかア。ゆるりつとお休なんし。客。枕とはな紙をもち出て行。客ははらがたつてならねども。せんかたなくねるにもねられず。あんなのむだ書をとんで。まぢ／＼しているうち七ツのひやうし木もなりて時うつ。田中の方の寺／＼には。じやん／＼の半鐘。思はれるのも。あんな郎はよつまるところはみな遊びのもの。あんな郎はよおす川しやうとく。あんな郎をすかぬゆへ。いさゝかな事を手にしてねるつもり。みな狂言にて。うちまへの松かざりをみるやうに。うしろ合せの白川よぶね。夜はさらりとあけて。榊子のすきまからさしこむあかりに。長持のはこりきりめくかわたれどき。下ではどつ／＼と米をつくを。ねずの男はあんなどうをひきこる。いれかはつて。客や男。あんなさん。おむかいに参りました。客。フア。もふその時分かの。客や男。おつしやつたよりは。少しおそいくらいでござります。客。喜のさん。しあんどふした。客。喜のさんは只今。おしたくをなすつてお出なされます。ト云所へ志庵があいたの夏いろ。さしき。置た羽織をとりかへ。より志庵をきてく。喜之介もみすのかみにて。かほをふきながらをきてくる。なつはまもあととよ

りき **ゑん** さあ。すぐにかへろう。**夏瀬**
たる。羽織のゑりがおれんせん。お待なん
し。**しあん** おいらんは。でへぶおつか
れの。トいへども。おす川はたわいなし。みな
くづをはきあつめ。あんどら泉居
の石塔のやうに。ならべてある。**喜** 此紙
屑をもやして置と。おぎやアノとい
ふやつができやす。**しあん** こふ紙屑
をはき集た所は。羊のへどいふもん
だ。**ゑん** いゝゝ。トはしこをりる。板
みかさねである。茶屋男ぞうりをなす。**茶男**
おまへさんのは。此二重はな緒で。ご
ざりますか。**夏瀬** 此間にお出なん
しへ。と。みな出る。**ゑん** おほき
におそくなつた。駕籠はいいつている
か。**茶男** いれて置ました。**しあん** と
んだるい心持。二日ゑひになりやし
た。玉やにてはふ大戸をあけ。かうしをきれ
いに洗いて。しきいにしほをもつてある。リ
やらばん着を。リやうりばん 此いかは。あ

をりじやあねへか。**喜** なに真いか
さ。かな川だア。みなさへ。此あつこ
とを。あをりやするめいかだと。安ひ
はな。**リやうりばん** だれかれんつに。
したがいう。**喜** 何さ。とんだ事をい
なさらア。此畜生めしつゝ。此あぢや
アどだへ。いゝはだアみなさへ。生
麥だあ。羽田でも。こふいふ丈長はね
へはな。トいふをよそにき。三人
しの物を出してくりや。**茶男** マアちつ
とおよりなされまし。**喜** マアちつ
うござへしやう。**ゑん** そふさゝ。
茶男 さやうなら。と。いりりうちへは
物を出してわたす。むかふひやうごやなぞにて
は。もふ夏世をむらき。若者あげゑんをふき。暖
簾をかける。竹村のまへには名札をはがした。跡
のある熟籠つんである。かしの客ハツを打て上
る。一人はきりやのよこての小便所。むかふのは
めへ小べんで。のゝ。**東勝** コウ鉄へ。までへ。
字をかきなから。いふにやアナ。きいてくん

さへ。鉄さんといふものは。わからね
へものでござへやす。こんぢう。さよ
じさんに一本んかりて。たて引きをし
てあげてやつたに。今夜もしらん顔を
していいやす。あんまり押がつゑ。ハ
ツを打てあがる客はみんなあの位なも
んだ。なんのかのといやアがつたから
な。おれがナ。いゝかげんに戸尻を合せ
ておいたせ。あいつアとうもろこしを。
横ぐわへにしやうといふ。面だし。み町。ふ
しはハツにみせを引ゆへ。ハツを打てあがると。
す一本にてすむ。これこみづなきやくのする事也。
鉄 ほんにそふいつたか。とんだ氣紛
じやあねへか。こんぢうは二朱銀をほ
うり出して。酒肴付てあすんできたア。
あいつがいふなア。五年ほど跡のこつ
たあ。こん中もナ。きらすにあみをい
れていつたやつで。ほぞを七八へつ
けやあがつた。あすこの屋臺はねは。
大方あいつが食いつぶしてしまふだろ

う。あの圖體をみや。維持にすればいいぜ。エ、くさびをそぎたくなつた。ト云はせつあん。鬼勝なんでも晩にやあ。へ行こと也。虎やへあがるべうざへ。こいつア。思ひつきだつてな。エ、引。ト行通る。たいてあつてゐる。ですりによりかゝつて。こがまきのこにりといふ新造。しもげたやうな禿客をつけてゐる。これまじりみ。新造のおつなでうしせ以下の女郎とみへるなり。新造のこゑにて。ヤヤ喜のさん。どふなんしたへ。喜のお久しいの。何今時分までうかゝしてゐる客があるものか。いゝかげんにして歸りねへ。とんだねむそうなめだ。みつのへさんによくいつてくんねへ。新造 おさらばへ。喜之介三人は。江戸ぶしをうなりなが。喜之介三人は。江から大門を出る。茶男 かづさやア。かご アイこゝでござりやす。のたな下のあたりにて。返事をする。茶男 なせ。こつからのせねへ。茶男 高札ができてから。大門のきはへ駕籠がなりません。泉やの娘下女をつれ。朝参り。お夕さん。でへぶよりかへる。おん

お早いお出の。ゆふ ヤヤゑんさん。どふ被成ました。けさは山谷のしやうばうじの毘沙門さまへ参りました。おんこゑんさんに。よくいつてくんなさへ。ゆふ さやうなら。おしづかに。かご サアめしまし。茶男 おはき物はついたか。さやうなら此間。おんよくいつてくりや。かご こつちらの旦那。お羽をりをもちつと。おいれ被成まし。かご ばうぐみよし。どつことな。トかご三てふと。〇をくられて行て

うちんと。わかれ路にきくかねとは。かたげてみれば。つりあはぬ大じんきやくにこいとらう。おくるけいせい道心者。ものもらひ同士。朝咄し。口よりけむの出る比。立や今戸のかはらけむ。すはる四ッ手に三人は。にはん堤を。一ッさんに。いそがせてこそ。三重へ行空の。

山東京傳戲作

總籬大尾

四方先生著

狂詩礎

唐詩礎明詩礎すうひて初念の
狂詩のつる懐と席上の早作も多

四方先生撰

古今狂詩刪

近刻

本邦古

の狂

詩のあらはるるを

東都曲

百人一首狂歌代衣衣笠簾

右の名をうたふまう今の人の

歌ともあらめてこそは馬場氏
くもて彩色どりといひ

通

總集 竹山東京傳作

言 士早未の人情の五町乃のあは
うがわてふめあはをまうらふ
くもいさるのたれをんたり

百人一首

初衣抄

京傳老合作

馬鹿謡 初衣抄
小う山をのち幾百人一首の初衣抄和漢
のまけ引あせふもつるううたはを

狂歌集

鹿林部典類撰

はまのまのり家いさう狂歌あふふ
家との風洞をまうらふもあは狂歌

醉の家の集あふふ
又自集あふふもあは